

尾道水道及び付近の貝類についての考察

滝

巖

私は尾道市の南側にある向島(むかいしま)に永年居住したが、その間に附近の貝類を採集していた。昭和17~18年に尾道市西部の海岸で干潮時に干潟になつてゐる所の砂上で死殻を拾つたがその中オオネズミガイ *Polinices kurodai*、コズツガイ *Gastrochaena grandis* については当時珍らしかつたので報告した(貝類学雑誌、13、1948)。これらの貝は実際死殻の採れた所に住んでいたものとは考えられず、どこか他から運ばれて来たものようで、正確な産地は不明としておいた。

その後、これらの貝を含んだ土砂は尾道港修築のため同水道の浚渫によつて得られたもので、その位置は尾道港の中央部及び西部にわたつていたことが判つた(尾道市史、第1巻400頁)。貝類は上記の他にアカニシ *Rapana thomasi*、ハマグリ *Meretrix meretrix lusoria*、サトウガイ *Anadara satowi*、フスマガイ *Clementia vatheleti*、キサガイ *Cardilia semisulcata* 等も採れた。この内アカニシ・ハマグリは尾道水道に今日棲息していることは知られていない。又一方アサリのような最も普通な種が見当たらないことから、貝類相が少し異つてゐるものと考えられる。更にサトウガイはよく成長した二枚の殻片の合つたままの死殻が得られていること、コズツガイ・オオネズミガイ・フスマガイ等も完全によく成長した標本であることから、これらが潮流によつて他から運ばれて来たものではなく、その場所(尾道水道)に棲息していたと判定せねばならない。

又一方、尾道は古くから東西に通ずる海上交通の要所に当り港湾として発達し有名であるが、この水道は昔は現在よりももつと幅広かつたのであり、向島も口碑・伝説によれば数個の小島であつた。これらは(1)山陽街道が現在の尾道市の山麓部を通つていて、地名も“山の尾の道”即ち山の麓を歩いて行く所の意でその事情を物語つてゐること、(2)古地図が若干残つていてそれを示していること、(3)現在の陸地の地名(尾道市長江町・築出町等、向島では江ノ奥・道越みちこえ・河尻等)が海岸であつたことを示していること、(4)海浜植物ハマゴウ *Vitex rotundifolia* (くまつずら科)が現在の海岸から1km以上も入つた所に小群落をしていることが尾道・向島で数箇所あり、この植物は人生に利用価値なく人が植栽したものでなく、又之を庭園に植えてもよく育たない傾向のあること等から、往古に

おいてこの地域の海洋は広くて、その後次第に土地隆起によつて水道は幅狭くなり、今日の尾道・向島の平坦部を生じ、向島は小島が陸続きになつて一島となり今日の地形に到達したものと考えられる。

私はこの地方の地理調査所地図(2万5千分の1)で試みに10mの等高線を描き取り、これを旧時の海岸線と考えると上記の諸事項によく合致することを知つた。即ち約2,000年の間に10m程度の陸地上昇があつたことになる。そうなると今日の尾道水道の水深は7~10mであるが平均的に見て約20mとなり、今日の備後灘とはほぼ似たような水深になる。又今日の尾道水道は南北の幅が狭い所175m、広い所で550mであるが、旧時を作図上推定すると各々235mと700mとなり、尾道市栗原町と向島北部の湾入部が南北に連絡することになるので、その部分では南北約4,000mの広大な海となるのである。このように幅広く水深も大きくなると干満による潮流も盛であつただろうし、貝類の棲息条件としての海洋が變つたものであつたろうと思われる。

尾道水道の東の入口に近く山波の洲がある。干潮時に広大な砂地の干潟となる所でイワムシ等の餌虫の好採取場であるが、ここでカラスノマクラ *Modiolus nitidus* の死殻1片を拾つた。これは殻長77mmあり、かなり大形のものであるがその殻色から見てもよほど古い死殻であると思われる。本種は房総方面から鹿児島県にわたり分布しているが瀬戸内海ではよく知られていない。

上記の貝の中、オオネズミガイは殻高35mmあつたが、相模湾・鹿児島湾・華南海南島から知られており、又備後灘でも採れたがそれは小形でひどく蝕害された死殻のみであつた。コズツガイは和歌山山水軒・田辺市・琉球から、キサガイは赤道地方から本州中部にわたり、フスマガイは本州東北地方から高知県にまで分布している。

以上の諸種は熱帯或は暖帯の海に住む貝で、今日の尾道水道には棲息していないが瀬戸内海の外洋に近い海域には住んでいるものもある。要するに往時尾道水道は幅広く水深く、比較的温暖な海水が流通して暖帯系の貝類が棲息していたが、年と共に海底の隆起によつて海が狭く浅くなり、次第に死滅したものと推定できるようである。唯これらの貝類の棲息していた年代を推定することは今の所できないので、数十年以(以下419ページへ)

(394ページより)

前か、数百年以前か、或は更に溯るものかは判定しがたい。

以上の他、備後灘の打瀬網(向島干沙の漁夫による)の採品からピヨウブガイ *Trisidos tortuosa kiyonoi* の1片を得たことがある。本種は愛知県知多郡師崎町、九州博多湾・唐津湾・今万里湾、山口県青島島もろざきに現棲が見られ、化石は愛知県豊橋附近の小坂井、富山県水見み(洪積世)、沖積世のものとしては大阪市各所の地下から多数出土しているし、又山口県柳井附近と下関市長府町海岸のサンドポンプによる埋立の際にも死殻が採れている(河本卓介氏より拝聞)。

更にハイガイ *Anadara (Tegillarca) granosa* は東京から西南の本州諸地方で貝塚から多数出土すると共に海からも死殻が得られるが、生貝の採れる所は瀬戸内海では少く、山口県の一部で採れると云う。私は先年児島湾八浜はちはまで死殻を拾ったが、その殻は特に厚く

殻長72mmという大形のものであつた。八浜は国鉄宇野線の駅に近くで、その北側は海が退いて約1kmも遠のき、一面の粘土質の土地になつていて干拓作業が行われていた。その粘土に埋まつていたのである。この地方も土地隆起が著しい。

以上を通じて考えて見るに、我々が貝類を採集するに当り死殻を得ることが多いが、その内の或者はその産地に棲息しているが又或る種は死滅しており、その分布が注目されることになる。それで死殻のみで生貝の得られなかつた時は特に注意することが肝要である。尾道水道の例は特に著しい例で、又全体として瀬戸内海の中央海域において若干の貝類は死滅して行く傾向があるようで、それらは半化石 *semifossil* として取扱つてよいと思われ、貝類相を調べるに当り現棲のものゝ死殻のみのものとを各々記録しておく要があると思つている。
(昭和34.1.28)

熱帯魚の飼い方

藤本義昭・藤岡 昇 著

室内にまとまった野外の自然を導入する最も手近な方法……それはアクアリウムである。この美しい独立した閉鎖社会を自然の袋で長く継続させるには淡水、飼育法についても著者の考案による種々な道具がのせられている。また水草については特に章を改めて、種類から植え込み方観賞法までくわしい。

魚…特に美しい熱帯魚の習性と水草の知識とが必要である。

この書物は熱帯魚の種類はすべて図入りで説明し学校などで飼育栽培する最良の手引である。

B 6・280円

(岡村はた)